

新型インフルエンザに関する緊急情報（第4報）

2009年11月4日 京都大学保健管理センター

新型のブタ・インフルエンザ(A/H1N1)が本格的な流行期に入っています。もしばらくは流行が続く、いったん下火になりますが、来年再び流行すると予測されています。再流行の際に毒性や感染力が変化する可能性も指摘されています。冬場に従来型の季節性インフルエンザ(Aロシア型、Aホンコン型、B型)もいっしょに流行するかどうか、わかっていません。

■感染しやすい人、重症化しやすい人

20歳前後の年齢以下の人は免疫を持っていませんので、身近に発症者がいると高い確率で感染します。反対に20代後半以上の人は、1977年以降しばらく流行が続いたAロシア型インフルエンザ(ソ連風邪)の影響によって基礎免疫ができているためか、感染する確率はかなり低くなります。

重症化する確率は、小学校低学年をピークに小児で高く、喘息など呼吸器疾患のある方、慢性腎疾患のある方も高くなります。妊婦もやや高めです。基礎疾患を持っている方、妊娠中の方は、主治医に相談して予防接種を早めに受けるようにしてください。



■新型インフルエンザの病像

新型インフルエンザの潜伏期は3日前後で、通常の季節性インフルエンザの1~2日より長いのが特徴です。反対に、発熱期間は1~2日のことが多く、季節性インフルエンザに比べて重症感に乏しく、早く回復する傾向があります。喉の痛み、鼻水、咳のいずれかを伴うのが普通です。

インフルエンザの診断には迅速検査キットを用いますが、感度が40~80%ですので、陰性であってもインフルエンザを否定することはできません。陽性に出ても、新型か季節性かの区別は(季節性B型を除いて)できません。秋口や春先には、インフルエンザではない普通の風邪がインフルエンザ以上に流行りますので、診断はかなり難しくなります。

■インフルエンザの対策

予防法の基本が手洗いとうがいであることに変わりはありません。洗面所にハンドソープやペーパータオル、人の集まるところにアルコール消毒剤を配置するとよいでしょう。

インフルエンザであれ普通の風邪であれ、発症してしまったら、解熱後2日を経過するまで自宅で安静にします。食料は家族や友人に自室のドア前まで運んでもらいます。なお、喘息などの基礎疾患のある人、呼吸困難などで重症感のある人以外は医療機関にかかる必要はありません。



イラスト・武田浩乃

研究室やクラブ・サークルで多数の人が相次いで発症した場合は、それ以上の拡大を防ぐために活動全体を一時停止します。潜伏期が3日前後であること、発症前日から感染力を持つことから、それらの期間を十分にまたぐ日数、最短でも5日、できれば7日間の閉鎖が必要です。